



Jeroen Touwen. *Extremes in Archipelago: Trade and Economic Development in the Outer Islands of Indonesia, 1900-1942*. Leiden: KITLV Press, 2001, xvii+459p.

著者の Jeroen Touwen は、Leiden University で社会経済史の学位を修めた。本書は、学位論文を加筆修正して出版されたものである。オランダ植民地時代の最後期 40 年間（1900-1942）におけるインドネシア諸島の経済的動態に関する研究である。

書名に含まれる Outer Island は、一般に、「外島」と訳される。首都ジャカルタを擁するジャワ島、マドゥラ島そしてバリ島をのぞく、現在のインドネシア共和国を構成する残りの島々の総称として用いられてきた。ジャワ島は、インドネシアの中では面積が 5 番目に広く、国土の総面積のわずか 7% 強を占めるに過ぎない。「外島」ということばの中に、ジャワ島中心主義的史観が含まれているという理解は、インドネシア研究に従事する人に広く共有されるものである。本書における著者の関心は、1900-1942 年における「外島」の輸出交易の発展とその経済的影響に向けられる。本研究の目的は、国際市場取引に関わることになる、「外島」の経済的発展の多様性を説明し、その差異を明らかにすることにある。「外島」経済を、東南アジア地域の文脈の中で理解するという、挑戦も明らかにされている。本書では、「外島」における経済活動の動態的側面が、輸出交易に関する膨大な量の統計資料や記述をもとに再構築されている。

偶然にすぎないのだろうか、本書がこの時期に出版されたことは興味深い。1998 年 5 月、独裁的で中央集権的であったスハルト大統領政権が終焉を迎えた。この一方で、国内行政・政治の地方分権化政策が、本格的に始動してもいた。インドネシアにおいて、現在「地方」と見なされる場所と、「外島」の範囲が地理的にほぼ一致するが、本書の中では、そのことが明示的に言及されているわけではない。だが、本書を通読後に喚起される「外島」像があるとするれば、それが急速な脱中央集権化が進められてい

る「地方」像とどのように重なりあうのか、1942 年からの 60 年間に、インドネシアの社会経済状況にどのような変化が起こったのか。経済分野に限らず、インドネシア研究に従事している人であれば、現在進行中の地方分権化の動向と重ね合わせながら、本書を読むことになるかもしれない。

まず、本書の特徴的な研究姿勢を確認しておく。第一に、1900 年から 1942 年、つまりオランダ植民地政府による支配から日本軍政期へと移行する直前までの、短く限られた歴史的時間を設定し、研究の歴史的現在を絞り込んだことである。第二に、スマトラからイリアン・ジャヤまで、現在のインドネシアを構成する広大な諸島全域を鳥瞰図的に視野におさめている点である。インドネシアは、300 以上の言語を母語とする民族集団が暮らし、13,000 以上の島嶼群からなる国家であり、そのすべてを研究の対象とすることは不可能である。本書では、「外島」の代表となる地域・州に焦点が向けられている。

本書の構成は次のとおりである。

1. Introduction
 2. The Outer Islands: More diversity than unity
 3. European dynamics
 4. Asian dynamics
 5. In the periphery of economic expansion
 6. Economic policy: beyond the reach of ethical intent
 7. The integration of economic extremes
- Appendices
Bibliography
Index

第一章では、研究の目的、現在のインドネシア経済研究の動向と、その中における本研究の位置づけについて説明される。オランダ植民地時代の否定的な側面に焦点を当てがちな研究から、積極的にその肯定的な影響を見出す研究が、近年注目されはじめている。控えめにしか書かれていないが、本研究の位置づけは後者の趨勢に乗るものと理解してよいだろう。「外島」の多様性を説明することが本研究の目的であると、再三、繰り返されるが、その焦点が向けられるポイントは次のとおりである。①輸出交易

に関する「外島」の地域間比較、②ヨーロッパと「外島」の地元企業家の相互関係、輸出産業の発展の軌跡、③華人仲買人の役割、④海洋交易ネットワークの形成、⑤オランダ植民地政府の経済政策の影響力であり、これらを比較考察することで「外島」の経済動態のメカニズムを描画していこうとするのである。ついで、経済学の知識が十分でない読者を想定した一般的な経済発展理論と、現在のマクロ経済学研究に関する説明、さらに統計資料および古文書資料の解説が続く。

第二章では、1900-1942年における「外島」経済について、先行研究を紹介しながら、説明する。著者は、この時期の「外島」経済の特徴として、第一に、地域間交易の増加、第二に、外国取引の増加の二点を指摘する。1900年以降は、とくにゴム・コーヒー・コブラ・コショウなどの農産物、スズ・原油などの鉱物資源生産を中心として農園が経営されるなど、「外島」と西洋の関わりが顕著になる。ところが、「外島」はかならずしも一枚岩的な経済発展の傾向を呈するものではなかった。著者は、ヨーロッパ資本の投資規模とその現地支配の度合い、各地域における地元資本家との関わり具合をてがかりに、「外島」の各州を4つのクラスターに分類することを試みた。

ここでは、このクラスターの4分類についての概要が説明される。各クラスター内の輸出換金作物の生産状況を詳述しながら、地域間の差異と相似が考察される。4つのクラスターは次のとおりである。第一クラスターは地元産品目の貿易取引額が大きく、ヨーロッパ資本と地元資本の協調がうまく組み合わさっている地域である。東スマトラ、東南カリマンタン、そしてパレンバンが含まれる。第二クラスターは、地元資本の投資による輸出品目の生産が比較的多く、ヨーロッパ資本の投下はさほどに顕著ではない。西スマトラ、アチェ、ジャンビ、ランブン、西カリマンタン、マナド、南スラウェシが属する。第三クラスターはパンカ、ブリトゥン、リアウなどの島嶼群であり、比較的面積は狭い。ここはヨーロッパ資本の投下は多いが、地元資本の介入が少ない。急速な成長を遂げつつあったシンガポールからの距離が近いということもあって、華人の労働力移動がもっとも顕著に見られたクラスターであっ

た。最後に、第四クラスターは、タバヌリ、ベンクル(以上スマトラ島)、マルク諸島そしてバリ島以東チモール島までが含まれる。輸出生産物が他クラスターに比べて少ない上に、ヨーロッパ資本の投下も少ない。

第三章では、ヨーロッパ資本の農産物大農園や鉱物資源採掘への経営資本の投下が、どのように各クラスターの中に参入し、力を伸ばしていったのかについて考察される。特に第三クラスターで展開した換金作物農園の生産状況に関して、コーヒーやタバコ農園などの例が、「外島」のいくつかの州を例に紹介されている。こういった農園経営や鉱物資源採掘の frontline にならず付随して来る現象としては、低賃金の非熟練労働者の移動(ほとんどが華人)とその結果としての人口増加とインフラストラクチャー整備の顕在化があげられる。農園や採掘現場の周囲のインフラストラクチャー整備が問題とされてくる時代の幕開けであった。ヨーロッパ資本の投入、農園経営、そして「外島」の地元資本家の三者の相互関係が展開する場面として、比較考察がおこなわれる。

第四章で焦点が当てられたのは、主として第二クラスターである。このクラスターの特徴は、地元資本家の力が比較的強く、コブラやゴムの生産が小規模ながらも華人の仲買人をとおして、国際市場への輸出が続けられてきたと著者は指摘する。本章では華人仲買人の「外島」におけるプレゼンスとその位置づけ、関心が向けられている。小規模小作農中心で生産されてきた農産物供給は、やがてその目的地を国際市場の中に見いだす。コーヒー、コショウ、そしてコブラの生産などが例にあげられているが、とくに西スマトラにおけるゴム農園経営の詳細が事例として取り上げられている。また、1934年に、国際市場におけるゴム価格を安定させるために、ゴムを産出する植民地経営をおこなうヨーロッパ諸国とタイ国などの合意のもと、輸用量が規制されることになった。オランダ植民地政府は、インドネシア国内でのゴム取引価格に、付加税を導入する決定を下したが、税額がどんなに高くなっても、その利鞘を狙うに足るゴム生産の基盤がすでに整っていた。資本家とゴム樹液の採集者の間で、*bagi dua* 制(設備や加工薬品等を折半する)が導入されるようにな

り、一方で、華人仲買人が介入する状況下では、正規の交易経路以外で取引されることも、当たり前のことであった。付加税はオランダ植民地政府が管轄する Rubber Foundation が管理して、「外島」各地の道路建設、学校・病院などの社会的資本の整備に充てられた。この章では、ヨーロッパと「外島」との相互関係がゴム農園の例をもって説明される。

第五章では、第四クラスターに分類された地域に焦点が向けられている。このクラスターは1900年から1930年までの30年間は、一次産品の輸出景気に完全に乗り遅れた地域であった。いわば辺境の中の辺境にあり、特殊な高級海産物や林産物が産出される地域であった。その取引によって、17世紀以来、断続的に小規模な地域間交易が活発に展開される地域であった。とくに重点的に説明されているのは、「外島」におけるコメの地域間交易である。たとえば、スラウェシ島の商業都市であるマカッサルは、コメの集散地であった。ジャワ島から運ばれたコメは、マカッサルを経由してカリマンタンおよびスラウェシ島以东の「外島」地域に運ばれた。農園経営が増加し大規模になるにつれ、農園労働従事者が消費するコメの量が増加するが、1930年代の蘭領インドでは、ベトナムやタイからのコメの輸入が増加していた。その一方で、豊かな穀倉地帯を後背地に控えるマカッサルは、外国市場へのコメの輸出をおこなっていたという。著者は、このことから、東南アジア経済において、マカッサルは傑出した中継交易都市であると強調する。

第六章では、20世紀に入ってから植民地政府の経済政策について考察される。増加する一方の人口の食糧生産を支えるために、過疎の「外島」への人口移住政策 (*kolonialisasi* コロニアリザシ、のちの *transmigrasi* トランスミグラシ) が始まったのが1905年であった。土地なし小作層に土地を開拓させ、農業生産性を向上させる目的もあった。この人口移住政策の成否については、入植の時期や場所によってばらつきが激しく、一概には考察できるものでもない。この時期の植民地政府の政策の功罪について、まず人口移住政策は、結果的には「外島」の開発を実現するものとは到底なりえなかったことが指摘される。人口移住政策の対象となった「外島」の多くは、土壌が貧弱で農耕に適さない土地が多かっ

たこと、開拓入植したあとの行政からの援助等が皆無であったこともあり、成功とはほど遠い結果となった。強制栽培は、ジャワ島であれ、「外島」であれ、農業従事者の覇気を喪失させるばかりであり、地場産業の自発的な成長を阻むものであったとも述べている。

第七章は、ここまでの各章の内容と結論についてまとめたものである。とくに総括するような結論が述べられているわけではないので、紹介は割愛する。

次に全体を読み終えてのコメントを述べる。インドネシアの国土の90%以上を占める「外島」における経済的発展と輸出交易の成長についての研究であると銘打ったものの、「外島」の事例が、限られた州/地域に限定されていることが気になった。たしかに文献資料が豊富にある地域を代表させれば、整理して考察しやすいが、現在の東部インドネシア地域に相当する部分の記述がほぼ欠落している。このあたりは、すでに17世紀の香料交易時代以来の研究蓄積によって状況は把握できるとはいえ、著者がはじめに意図した「外島」の多様性を明らかにしようとするのであれば、事例としてわずかであっても言及する必要があったのではないか。同様の理由により、ジャワ島における農園経営の状況とヨーロッパ資本の投下状況について、触れる必要があったのではないか。第一章において、著者は「外島」経済を東南アジア地域の中に位置づけてみたいと言明しているが、実際にはこの時代の周辺国/地域の様子も、言及されていない。研究の目的と趣旨、著者の関心領域外であることを考慮したとしても、周辺の状況説明が相対化する「外島」像の可能性は思いおぼやなかったのだろうか。「外島」とジャワ島は結局のところ、何が違っていたのか。本書の中で著者が繰り返す「外島」の多様性を明らかにする試みは、さらに深く追求できたように思われる。

本書の趣旨を逸脱するかもしれないが、インドネシアの国土の規模や圧倒的な民族・言語集団の構成数について情報を持たない読者に対して、不親切な印象を受けた。なぜ換金作物の種類が多岐にわたるのかの説明、地理的・生態環境的な背景に関する記述がなかったからである。著者は、クラスター分類

の作業では、ヨーロッパ資本の受け入れ具合と、地元企業家の資本力だけを基準としている。しかしここには自ずと生態環境的な背景や、文化社会的な背景が作用しているはずである。これらの点に関して、深い記述と因果関係の証明を明らかにする必要はかならずしもない。だが、本書が今後、どのように読まれていくのかを考えると、「外島」という地域概念を設定していることがたいへん興味深い。経済史の領域において、このような地域概念が使われたことが刺激的なのである。既存の社会経済史を越えるような研究となることを期待する立場からすれば、もう一步、近接する学問領域への関心が寄せられていたら、さらに重層的な研究となったのではないかと思われるのである。冒頭で触れたように、インドネシアにおける地方分権化の動きと、本書において記述される「外島」の多様性とが重ねて読まれる可能性を思えばこそ、そのような読後感を得た。

(瀧元聡子・東南ア研)

Frederick Cooper; and Ann Laura Stoler, eds. *Tensions of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World*. Berkeley; Los Angeles: University of California Press, 1997, x+470p.

ある社会空間における出来事を理解するためには、「場」そのものを構築物として理解する必要がある。編者のクーパーとストーラーは、それぞれ歴史学(東アフリカ)と人類学(スマトラ)という異なるアプローチと地域から、植民地を理解する上でその必要を見出した。分野を超えた議論を1989年のシンポジウムに一旦結実させた後、80-90年代に行われた研究も顧みて課題の再考を行い、その到達点として上梓されたのが、本書である。そのような息の長い議論の成果であり、言及されることも多い論文集であるが、これまで具体的に書評として取り上げられてこなかった。

序文、“Between metropole and colony: rethinking a research agenda (本国と植民地のはざま——研究課題の再考)”で展開される議論は、植民地というひとつの政治体制を理解する上で常に念頭に置きたいものである。議論の骨組みは大きく三つに集約

される。第一の柱は、植民地という空間を本国から分離したものとして捉えるのではなく、本国/植民地、支配者/被支配者をひとつの分析枠組で扱う試みである。つまり、それぞれの歴史は同時進行で互いに照射しあって生み出されるものであり、支配者はゼロから植民地を築いたのではないことを示そうとする。第二は、ブルジョワに注目することである。ここでのブルジョワは、議論の核であるにもかかわらず曖昧に定義されている。強いてまとめるならば、ヨーロッパ社会の生んだイデオロギーを、普遍的に実行しようとする社会集団の意であろう。植民地政府と常に重なるとは限らず、むしろ国境にとられず、世論や国際標準として立ち現れるものとして、ブルジョワ世界は捉えられる。最後の柱は、第二の柱とも関係して最も中心を成すものだが、植民地、特に支配者側の多元性を示すことである。コロニアリズムという言葉が、植民地のもつ多元性を覆い隠すことを鋭く指摘し、帝国がひとつの見方を共有するにいたる揺れとプロセスに注目することで、タイトルに示されるところの tensions (緊張関係) を論じる。つまり、ブルジョワは普遍性を追求しながら、誰が普遍性を享受するのかという点においては、逆説的にも包摂と排除の線引きを行う。その線引きは揺れ動き、それは特定の空間と時間においてそれぞれ異なる形で表れる。従って、植民地の持つ様々な問題は、政治体制だけの問題ではなく、ブルジョワそのものが抱え込む緊張関係に因るといえる。よって、その緊張関係を読み解くことが本書の課題とされた。さらに、緊張関係の解釈を通じて、独立による政治体制としての植民地支配の終焉が、そのまま植民地を過去に追いやるものではない、と示すことも、本書の重要な試みである。

実際の収録論文においてどのような議論が展開されるのだろうか。本書は、四部13章で構成され、多彩な分野と地域を扱っている。全ての議論を紹介することは評者の力を超えており、また序文との連続性を鑑みて、両編者の論文を取り上げて後述するが、ここで簡単に章立てを紹介したい。

第一部は“framing”というタイトルのもと、自由主義(1章)や帝国主義(2章)を巡る大きな言説を、本国での議論の展開を中心に扱う。(1章: Uday S. Mehta「排除の自由主義戦略」、2章: Anna Davin

「帝国主義と母性」, 3章: Homi Bhabha「ものまねと人について——植民地言説の葛藤」)

第二部は“Making boundaries”と題し、本国や植民地を問わぬ様々な場所で、言説に基づいていかに線引きがされたか、ジェンダーや人種など具体的な問題を挙げて現実に迫る。(4章: John L. Comaroff「帝国の幻想, 良心の競争——南アフリカにおける植民地支配のモデル」, 5章: Ann Laura Stoler「性的恥辱と人種の境——植民地東南アジアにおけるヨーロッパ人アイデンティティと排除をめぐる文化政治論」, 6章: Susan Thorne「『イギリス人の改宗とひとつの世界への転換』——産業革命初期イギリスにおける伝導型帝国主義と階級言語」, 7章: Lora Wildenthal「ドイツ植民地帝国の人種, ジェンダー, 市民権」)

第三部は, “Colonial projects”として行われる, 子育てへの介入(8章)や住居政策(9章)といった具体的な政策を論じる。(8章: Nancy Rose Hunt「『赤ちゃんとブラシ』——ベルギー領コンゴにおけるヨーロッパ人女性, アフリカ人の出産の場, 母乳育児への植民地的介入」, 9章: Gwendolyn Wright「近代的奉仕の伝統——フランス植民地政策における建築と都市様式, 1900-1930」, 10章: Fanny Colonna「フランス領アルジェリアでの従順さの教育」)

第四部は, “Contesting the categories of rule”と題され, 帝国の構成要素間の様々な緊張関係を論じ, ここにクーパーの論文(12章)が含まれる。(11章: Dipesh Chakrabarty「違い——植民地近代の棚上げ——イギリス領ベンガルにおける家庭についての議論」, 12章: Frederick Cooper「脱植民地化の弁証法——第二次世界大戦後仏領アフリカでのナショナリズムと労働運動」, 13章: Luise White「自動車はそぐわない——東部・中央アフリカにおける吸血鬼, テクノロジー, 労働」)

まずクーパーは, 植民地支配終焉のプロセスを, 労働運動とナショナリズムとの関連から論じる。ここでは本書の大きな議題であった「普遍性の矛盾」が, まず前提として扱われる。つまり, 植民地支配の現実では, 普遍性=文明化の使命よりも他者性の保持に全力が挙げられ, 本国により近づく都市や, 保持されるべき部族を離れる賃労働者の存在は, 政

府にとって喜ばしいものではなかった。その前提にもかかわらず, ブルジョワを支える植民地の経済活動は賃労働による生産地と, 集散地である都市のネットワークを作り出す。その不一致をつく形で労働運動が展開された。英領及び仏領のアフリカ各地での運動は, 暴力で押さえつけることが国際的に許されがたい第二次世界大戦後の状況下において, 先の前提を覆すことになる。つまり排他の方針を捨て, 普遍性の推進が開発というロジックで展開されるようになったのである。普遍性の推進を労働運動の側は, 組合の帝国規模での連合という別のロジックで展開し, その中でアフリカ人指導者が活躍することになる。ここにいたって普遍化は, 植民地の労働問題対策が本国と同じとなる形で現実となりはじめた。しかし普遍化の達成で終わりではない。クーパーは支配者側の揺れから被支配者側の揺れに論を展開させる。労働者という階級を基礎にした運動で本国との普遍性を獲得しえたアフリカ人指導者は, 同時期に独立をめぐる政治運動に身を投じる。これは, 逆に領土の線引きを行って上の普遍性を捨てることを意味する。この動きを宗主国側は歓迎して許し, 結果的に, 元労働運動家である政治家が開発のリーダーとして労働運動を抑圧する存在となった。そこでは「お国のために」という労働運動での普遍性追及とは異なる動員の論理が展開された。

クーパーによれば, 独立後のアフリカ諸国が植民地体制に似た抑圧の状況から抜けられないことは, 植民地支配だけの問題ではない。それは, 労働運動とナショナリズムという二つの緊張関係の帰結であり, 植民地政府やアフリカ人指導者, 国際社会それぞれが許した国家が, 単なる経済活動の管理人に貶められた結果であった。

クーパーの綿密な議論は, 線引きの矛盾にとらわれる支配者とその矛盾を突く被支配者というナショナリズムの図式を揺るがし, ヨーロッパ側の揺れの描写や批判にとどまりがちな帝国主義研究やオリエンタリズム研究を超える重要なものである。Tensionは決して単数ではなく, 複数の tensionsであることを明確に示した点で, 序文の議論にかなうものでもあろう。敢えて批判をするならば, クーパーは国民国家の線引きによって普遍性の追及が足止めされたことを否定的に断じ, 普遍的合理性こそが生

活向上の鍵である、という著者自身の信念を前面に示して論を終えるため、ナショナリズムが動員の論理として決定力を持つにいたる仕組みを読みきれていない。この問題は、リーダーの言説だけが論じられ、動員される側の論理を欠いた結果であろう。

一方ストーリーは、植民地における欧亜混血児の扱いから、包摂と排除の緊張関係を示そうとする。新しい植民地であり混血児の少ない仏領インドシナと、歴史が古くメスティソ社会が形成されていた蘭領東インドが舞台となる。導入となるのは、仏領インドシナでの混血児による暴行事件である。その扱いを巡っては、血の論理以上に文化や環境が争点となり、混血児の法的カテゴリーが問題として浮き上がった。その際フランスが参考にした蘭領東インドが本論の舞台である。そこでは、混血児はメスティソという別個のカテゴリーで扱われるのではなく、認知によってヨーロッパ人として分類された。フランスはその政策を高く評価したが、東インドにおいても、より実際の論点として婚姻法問題や貧困問題が表れると、ヨーロッパ性を重要視する文化人種主義が露呈され、排除の営みが繰り返されていた。さらに混血児の側もオランダとは異なる第二の故郷を求めるナショナリズムを展開するなど、ヨーロッパ社会への拒否を示し、法的な分類は持たずとも一つの社会階層を作る状況にあった。

ストーリーの議論は、言説の解釈を超えて、法と現実のギャップに迫ろうとした果敢なものであるが、三つの大きな問題を持つ。第一は混血児と分類された集団そのものが、時々、各々の政治経済状況において大きく揺れた点を軽視しているため、クーパーの議論に比べて安直である。混血児といっても、ヨーロッパ社会との親和性を強調するものもいれば、現地人ナショナリストと共闘を試みるものもいたのである。第二は、比較に値する仏蘭両植民地の違いを示しながら、導入部と本論が完全に分かれたために、比較の機会を逸したことである。本論で展開されたように、蘭領東インドでの政策は、長い歴史を反映し、現実への対処として場当たりに揺れ動いている。それでは、導入部で示された仏領

では、蘭領を参考とした新法に対してどのような状況が現れたのか。この議論がないために、導入部の事例が恣意的に選ばれたものであるという印象があり、挙げられた他の事例もどれだけ現実を反映するのか、疑問を抱かせられる。第三に、資料の示し方が曖昧であるために第二の疑問は深まり、さらに議論の枠を狭めてしまった。植民地文書もまた、本書全てで議論する植民地という構築物の賜物にすぎない。しかし、ストーリーの扱う法や制度は、ある程度体系だった形で植民地文書に残されている。構築物であるという前提の上で、論じられる法が、どのような体系の、どの部分に位置するのかを明確に示すことで、法治国家そのものの意味と正当性を論じる可能性も広がる。史料批判の不足によって、せっかくの興味深い事象がゴシップの域にとどまっている。

帝国の tensions (緊張関係) は、果たして読み解かれたのか。言説を巡って、現実を巡って、様々な緊張関係は浮き上がった。しかし、浮き上がる緊張関係が果たして同じ根を持つものなのか、両編者の論文だけを取り上げても、明確ではない。おそらく本書での緊張関係とは、様々な決定や選択に際してとられる戦略が、本質論的な善悪や正当性に起因するのではなく、曖昧に時と場合に左右されるものであることを意味している。では、それは「帝国の」、「植民地の」、「ブルジョワの」と限定することのできる緊張関係なのか。クーパーは、逆に緊張関係が独立によって終わらないことを示している。本書は、時間軸を植民地期に揃える形で、歴史学と人類学の共同作業に挑戦したといえる。しかし、共同作業を行う上で重要なことは、むしろ緊張関係という議論の軸をより明確にし、それらの疑問に答えることではなかろうか。せっかくの違う時間も扱える共同作業である。場が植民地に縛られなかった（第一部や6章）のならば、時間も植民地の枠にとらわれる必要はなかっただろう。一歩進んだ共同作業に期待し、そして参加したいものである。

(村上 咲・京都大学大学院アジア・アフリカ
地域研究研究科)